

ミナミメダカ *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

県内の平野部から丘陵地にかけて生息が見られるが、水路のコンクリート護岸化を含む農業形態の変化、外来魚による捕食・攻撃などにより、個体数が減少している。

【形態】

体長 3cm。頭部は縦扁し、その背面は平たい。口は小さく上向き。目は大きい。体色は淡い黄色を帯びる灰褐色で、背面には頭部より暗褐色の線が伸びる。背鰭は体の後ろにあり、雄には欠刻がある。臀鰭は幅広く、雄では平行四辺形、雌では三角形に近い形をしている。雄の臀鰭後端部には欠刻があるが、雌には無い。北アメリカ原産で特定外来生物に指定されているカダヤシに似るが、尾鰭と臀鰭の形状の違いで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

京都府以西（日本海側）、岩手県以南（太平洋側）の本州、四国、九州、沖縄県。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の河川緩流域や水田、水路、ワンド、池沼、湿地に生息し、水面付近を群れて泳ぐ。塩分に対する順応性があり、海水の影響のある水域でも生息ができる。雑食性で、動物プランクトンなどを捕食する。産卵期は5～9月で、産卵時に雄が背鰭と臀鰭で雌を抱く。卵は水草などに付着させるが、しばらく雌の腹部に付着させたまま泳ぐことも多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内に広く生息していたが、河川改修、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化による緩流域ならびに水草の消失、乾田化や転作に伴う水路の干上がり、農薬散布により激減したと考えられる。繁殖などに伴う水田と水路の往来の阻害も大きく影響していると考えられる。オオクチバスやブルーギルなどの肉食性外来魚による捕食が深刻な影響を及ぼしている他、カダヤシによる卵および仔稚魚の捕食、攻撃による鰭損傷に伴う繁殖や遊泳の阻害などの影響により、個体群の衰退ならびに置き換わりが見られる。偏った自然保護活動に伴う、生物多様性の誤った認識と善意の放流により、他地域産ミナミメダカやヒメダカなどの品種改良されたメダカ類による遺伝的攪乱が起こっている。

【保全上の留意点】

水田地帯における水路の干上がり防止策ならびに緩流域や水草帯などの生息環境の保全、水路と水田の水域のつながりを復元させる対策が必要である。また、遺伝的攪乱の防止のため、他地域産やペットショップ等で販売されているメダカ類の野外への放流防止と啓発が重要である。ミナミメダカと誤認してカダヤシを放流する事例も多く、オオクチバスやブルーギルを含めた外来種の防除、啓発を進めることが重要である。

【特記事項】

メダカは1種として遺伝的に北日本集団と南日本集団に分けられてきたが、北日本集団は Asai et al. [2012(“2011”)]により *Oryzias sakaizumii* として新種記載され、瀬能 (2013) により新標準和名としてキタノメダカが提唱された。同時に、南日本集団は混乱を避けるために従来の「メダカ」を破棄し、新標準和名としてミナミメダカが提唱された (瀬能, 2013)。

【引用文献】

Asai, T., H. Senou and K. Hosoya, [2012(“2011”)]. *Oryzias sakaizumii*, a new ricefish from northern Japan (Teleostei: Adrianichthyidae). *Ichthyol. Explor. Freshwaters*, 22, (4), pp. 289-299.
瀬能 宏, 2013. メダカ科. 中坊徹次 (編), 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp. 649-650, 1923-1927. 東海大学出版会, 神奈川.

【関連文献】

岩松鷹司, 2002. メダカと日本人, 216pp. 青弓社, 東京.
佐原雄二, 2007. メダカの章. 内山りゅう (編), ヤマケイ情報館 今、絶滅の恐れがある水辺の生き物たち, pp. 129-155. 山と溪谷社, 東京.
竹花佑介・北川忠生, 2010. メダカ：人為的な放流による遺伝的攪乱. シリーズ・日本の希少魚類の現状と課題. 魚類学雑誌, 57(1): 76-79.

(鳥居亮一)